

## バリアフリーなところとからだのふれあいを求めて —幼児から高齢者までを視野に入れたダンス指導の実際—

高橋和子（横浜国立大学）

細川江利子(埼玉大学) 三木ひろみ(筑波大学) 寺山由美(千葉大学) 飯田路佳(慶應大学非常勤)

### 1. はじめに

#### 1-1 研究の背景

もともと「バリアフリー」という用語は、おもに障害者が生きていくうえで、製品や建物、環境といったハード面で使われはじめた。このハード面での「バリアを取り除く」ことは、もとよりソフト面での「バリアのあちらとこちらを自由に行き来する」意味として、「フリーバリア」（広瀬浩二郎・2004）や「ユニバーサルデザイン」「ユニバーサルサービス」（井上滋樹・2004）に通じている。このフリーバリアやユニバーサルデザインやユニバーサルサービスには、あらゆる人の立場から公平な情報とサービスを提供するという、コミュニケーションや人的サポートが含まれている。

社団法人日本女子体育連盟（以下、連盟と略す）の50年の歩みを振り返るとき、女性の地位の向上や社会への参画を促してきたし、きめ細かな教育支援やダンスを中心とした教材開発にも成果をあげてきた。その意味では制度面におけるバリアをフリーにする活動を行ってきたと考えてよい。しかしながら、人に優劣をつけるなどの差別意識が自分の思いのなかにあれば、他者を理解することはできず、フリーバリアにならない。この「こころのバリア（壁）」を取り払うところにはじめてコミュニケーション（共感）が生まれるのではないか。これを可能にする手立てを、私たちは、「からだ」に求めてきた。しかも動くからだを対象とする体育・スポーツ・ダンスに求めてきたのである。

この考えを出発点にするとき、障害者への眼差しやかけがえのないいのちへの思いも温かみをもってくる。障害者教育に長年かわり滋賀県に止揚学園を設立した福井達雨さんの著書を紹介したい。

『僕アホやない人間だ』

『嫌われ、恐がられ、いやがられて』

『子供に生かされ子供を生きる』

『子どもは闇のなかに輝いている』

『弱いことこそ強いのです』

『ゆっくり歩こうなあ』

これらのどれもが、ダンスや表現のタイトルになるし、教育の原点であることを教えてくれる。また、生命科学者の柳澤桂子さんの受精卵診断をめぐる提言にも共感できる。受精卵診断には異常な胚を排斥しようという下心が見え隠れしている。優性思想につながりかねない。障害をもつものを排除する社会は自己中心的で住みにくい社会である。弱いものをもっと守っていく社会であってほしい。そのように彼女は願っている。

本研究では、このような視点を大事に育ててこられた戦後の先人たちの歩みを点検しながら、タイトルに掲げた「バリアフリー」を一步進めて、「フリーバリア」への進展を企図している。そのこと自体が体育・スポーツ・ダンスの地平に新たな可能性を拓くと考えている。そのような社会構築を目指して、本研究では「バリアフリーなところとからだのふれあいを求めて」という視点を設定した。

## 1-2 研究目的

本研究グループは、長年にわたって研究代表者の高橋和子を中心にして「からだの内側を捉える」という視点から身体活動を捉え直し、幼児教育・学校体育・生涯スポーツなどにおいて、ダンスが「こころとからだ」に及ぼす影響について考察し実践研究を進めてきた。とくに平成14年度からは、連盟の各種講習会の中心メンバーとして「からだ」の概念を見直してきた。結果として、本研究の視点のもとに、学校体育における「体ほぐしの運動」および、表現・ダンスの特性を活かした「生涯スポーツの縦断的な研究」を進めることになっている。人間の生涯「零歳から百歳まで」にわたって、こころとからだを解放し、生き生きとかかわりあいながら身体活動に参加する姿を、全国に向けて発信したいと考えて研究を進めている。

本研究の構想は、これまでに連盟の事業において、2年間（平成14-15年度）にわたって、平成14年度は「身体-かかわり-表現」、平成15年度「はずむ-ふれる-からだ」という年間テーマのもとに継続的に実践研究を行い、その研究基盤を固めてきた。具体的には、連盟機関誌『女子体育』（年間10回発行）において、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、一般成人を対象にした、ダンス・スポーツ活動の実践研究成果を取り上げ、また実技講習会（サマーセミナー、ウィンターセミナー、ダンスムーブメント指導員認定・検定講習会など）においては、共同研究者を中心に関連領域の専門家も招聘して理論構築を行うとともに、先端的な実践指導を積み重ねてきた。

このような研究経過のもとに、本年度は、乳幼児、小学校、中学校、高等学校、大学、一般成人（教員のリカレント教育を含む）を対象とするダンス指導の場を提供してきて実践成果を検証し、将来の学校・社会におけるスポーツ振興に役立てたいと考えている。本研究では、以上に述べてきた研究目的のもとに、「バリアフリー」発想から一歩進めて、「ユニバーサルデザイン」（障害者や高齢者にも対応する多元的柔構造環境整備による住みよい社会づくりをめざす思想）的な考えにもとづく身体活動の創出の場を願っている。なお、本稿では、「ダンス」という用語を、まるごとの「こころとからだ」を稼働させるリズムカルな身体活動であると定義しておく。また、「舞踊」も同義語として使用する。

## 2. 研究方法

### 2-1 研究計画

次のような内容を構想している。また、これまでの研究成果をもとにして、今後の研究基盤をさらに固めて長期的に研究を継続することを計画している。本年度は本計画の初年度にあたる。

- 1) 「バリアフリーなこころとからだ」という視点から、本研究グループがこれまで行ってきた研究成果を整理し、乳幼児から高齢者までを視野に入れたダンス指導の課題を明確化する。
- 2) 明確化した課題をもとに、乳幼児から高齢者を視野に入れたバリアフリーなダンス指導方法のモデルプランを構想する。
- 3) 乳幼児から高齢者までを対象にしたダンス指導のモデルプランを各発達段階や領域で実践し、検証を行う。
- 4) 「学校・社会」の一体化した生涯スポーツの場(学社融合)の構造化を実現させるために、「バリアフリー」を超えた「ユニバーサルデザイン・ワーク」の課題についてダンス指導を中心にまとめる。

### 2-2 研究方法

本研究計画を遂行するために文献研究と実践研究を行う。

文献研究では、バリアフリーの考えにもとづく障害者教育やダンス教育、身体論などの先行研究をふまえ、共通点や重要な視点（キーワード）を明確にする。それにもとづいて実践研究では、「バリア

フリーのこころとからだのふれあいを求めて」のダンス実践試案から、発達段階における差異と共通点を明確にする。この実践試案は『社団法人日本女子体育連盟創立50周年記念フォーラム研究紀要』(2005)に示された実践に限定する。このなかには「体ほぐしの運動」の領域も含める。体ほぐしの運動は、体の調整や身体意識を高めることが期待される領域であり、ダンス領域における基礎と捉え直してのことである。本研究では、実践を重視することとし、そこで浮かび上がってくる問題点を検証する方法を採用する。

### 2-3 各発達段階における実践の構想

乳幼児から高齢者までを対象に行ったダンス実践を「表1」に示す。実践者、対象の地域、対象者の人数には差違があるが、「バリアフリーのこころとからだのふれあいを求めて」というテーマを受けての実践である点については共通している。

表1 各発達段階の実践対象と内容

発達段階	実践者(対象校・グループ)	対象	内容
乳幼児	①五十嵐淳子(ふくいふれあいの会)	0～5歳児	*じゃんけん遊び・手つなぎ・新聞紙・ダンス・寝による・ゆりかご・失敗談
	②金子直子(ひまわり幼稚園)	年少・年中・年長	*まねっこ・走るポーズ・柔軟運動・変身ごっこ・表現遊び
	③山田喜美江(山田リズム体操クラブ)	幼児	*キッズ教室・親子(リズム・ダンス)
小学校	④武半まゆみ(千葉県轟町小学校)	6年生	*円形コミュニケーション・スキップわりばしを使って・リズムダンス
	⑤加賀谷成秀(戸沢村立戸沢小学校)	高学年	*表現運動「ないた赤おに」
	⑥茅野理子(宇都宮大学)	低・中・高学年	体ほぐし(境内・水中・Gボール・祖父母) *他教科の学習内容から題材選び・学習展開の見通し(極の動き・擬態語・多様な繰り返し・自由性)
中学校	⑦野沢裕子(柏崎市立東市中学校)	1～3年 (保健室指導)	*手足感覚の覚醒・手当・マッサージ・呼吸・立ってみる・与える受けとる ブラインドウォーク・レスティング
	⑧熊谷昌子(大妻多摩中学高等学校)	1～2年生女子	*基本的課題・グループ創作・発表会
	⑨宮本乙女(お茶の水女子大学附属中) 七澤朱音(筑波大学附属中学校)		*走る一跳ぶ一転がる
高等学校	⑩高野章子(元都立国分寺高等学校)	1年生 2年生女子 2年生男子	*基本的な課題の学習・小作品 *進んだ課題・作品創作・発表会
	⑪君和田雅子(都立杉並総合高等学校)	1年生女子	*基本的な課題・10秒ダンス・小作品 *大きく・もっと大きく・小さく回る
短大・大学	⑫梶田みづほ(日本音楽学校) ⑬中村なおみ(仙台大学) ⑭三宅香・津田博子(日本体育大学)	1～2年 3年(保健体育教育論) クラブ活動	*基礎技能・作品発表・交流作品 *VTR(授業・発表会直前・発表会) *イメージ課題(運動・変化・連続) 美的(運動・時性・空間性・力動性)
障害者教育	⑮西洋子(みんなのダンスフィールド) ⑯佐分利育代(鳥取大学) ⑰山田喜美江(山田リズム体操クラブ)	子ども～大人 聾学校中高等部・大学 幼児・青少年・成人	*車いす+車いすでない人 *合同作品づくり・リハーサル・本番 *とちのみ学園・ダウン症児・作業所
生涯教育(スポーツ)	⑱矢野道代(矢野健康体操研究会) ⑲高橋真琴・名波陽子・飯田路佳他(日本リズムムーヴメント指導者協会) ⑳馬場京子・毛利あけみ・佐藤廣子・大塚真里子他(ダンスグループステップ) ㉑水戸眞由子(福島新体操クラブ)	親子から高齢者指導者 指導者 総合型クラブ(幼稚園・新体操・健康講座・体操・高齢)	*体操(椅子・タカ・坐)・ステップ・ダンス *リズムエクササイズ・ダンスムーヴメント・運動処方 *基本の動き(軸・関節の伸展・筋力&体力アップ・メイン・サブ・リラクゼーション) *身体作り・美しい身の振る舞い・ダンスムーヴメント・徒手体操・母集団・作品創作 合宿・貯筋運動・体操

### 3. 結果と考察

#### 3-1 理論的な前提

テーマ「バリアフリーなところとからだのふれあいを求めて」のもとにダンス指導を行う上で、その理論的背景になるのは、バリアフリーと最も関連がある障害者問題である。また、幼児から高齢者までを視野に入れるとき、従前の学校教育と社会教育が分離した考え方では難しく、両者のゆるやかな融合（学社融合）を目指す生涯学習の視点が必要となる。さらに、「ところとからだ」の問題を考えるのであるからには、身体論をふまえる必要があると考えている。

##### 3-1-1 障害者教育にみるスポーツの考え方

今回のテーマ「バリアフリーなところとからだのふれあいを求めて」にアプローチする原点を考えると、障害者教育の考え方が参考になる。おりしも、2005年2月には、知的発達障害者スポーツの祭典であるスペシャルオリンピックス（以下、SOと略す）が長野で開催された。スポーツを通じ障害や国籍を超えた「心のバリアフリー」を謳い文句に、86の国と地域から約2700名の選手団（アスリート約1900名、コーチ約800名）と約8500名のボランティアが参加した。ここでは、SO運動の基本的考え方にふれておきたい。次の3点が指摘されている。

- 1) 「オリンピックス」と複数形で表現されているのは、「いつでも」「どこでも」世界中でアスリートがスポーツを楽しみ、それをボランティアが支えているという一体感を象徴している。
- 2) 競技会では、年齢や性別、競技レベルの到達度に応じたグループ分け（ディビジョニング）があって、予選落ちはなく、出場者全員が決勝に進み、表彰台に立つ。国や地域の「争い」という考え方はなく、表彰式では国歌の演奏や国旗の掲揚もない。
- 3) 独自の形式として障害者と健常者がチームを組む「ユニファイドスポーツ」もある。

日本のSO運動の先駆者であり、2005年SO冬季世界大会の細川佳代子会長は、スポーツを通してアスリートの成長や変化を次のように述べている。

……自閉症で会話ができなかった子が、うまくなりたくて、一生懸命コーチの話を聞いてコミュニケーションをとろうとする。数字に全く興味のなかった子が、得点が出るのが楽しくて、数字に強くなり関心を持つ。人前で話せなかった子が、スポーツで自信をつけていくうちに、話せるようになる。

このように、スポーツでは、からだでコミュニケーションができ、ボランティアもかわりを構築しやすく、「ふれあう」を紡ぐ絶好の場が用意されることになる。ここでのキーワードは「いつでも・どこでも・だれでも・争いのない・自己表現・コミュニケーション」などが注目される。

##### 3-1-2 生涯教育におけるダンスの考え方

生涯スポーツ時代を迎えた今日、学校卒業後の人生を見据えたスポーツ活動の検討を行う必要性が叫ばれて久しい。近年は、女性のスポーツ活動参加者も増加の一途をたどり、男女共同参画社会実現の構想とあいまって、「いつでも・どこでも・だれでも」構想ともあいまって、一層のバリアフリーを旨とする生涯スポーツの普及・振興策が望まれるところである。そして、学校教育と社会教育が分離することなく緩やかに融合するとき、生涯学習社会が実現しやすくなる。本研究の目指している「学社融合」構想の本意はここにある。

さて、女性が取り組むスポーツ活動のなかで、特にダンスは、障害者・高齢者・寝たきり老人など

に対しても貢献しうる身体活動領域として、これまでも独自の意義を有していると考えられてきた。そして、これらの実践をとおして、今日のダンスは、女性のみならず性差をのりこえて、すべての老若男女にとって価値ある身体活動として認められている。なぜならば、生活活動間において、人間の直接的なふれあいをともなう身体活動が減少する時代状況にあって、ダンスの役割は、次のような観点からも大きくなっている。

- 1) 「いつでも・どこでも・だれでも」「からだひとつ」で始めることができる。
- 2) 希薄になりがちな人間同士の「かかわり＝ふれあい」を豊かにする可能性がある。
- 3) 身体運動による積極的な自己表現の機会になる。
- 4) からだの調整を助け身体感覚を高めるとともに、健康維持にも役立つ。

さらに、ダンスの本質的な要素の1つである「リズム」についても考察してみる必要がある。「よさこいソーラン」はいまや日本各地で踊られている。そして、2004年には、俳優の松平健が歌い踊る「マツケンサンバ2」が大ヒットした。マツケンサンバ2の特徴を、お茶の水女子大学の内田忠賢が、「いつもと違う自分を見せられる・踊りもほどよい難しさ・ゆるやかに連帯するけれど拘束しない」こととして、まさに現代都市のお祭であると見なしている。この2つの「踊りの場」を支える魅力を抽出するならば、本研究では、「リズムにのり」「みんなで楽しく」「変身できる」というキーワードに注目している。

学校教育においても、多種多様なダンスが享受されている社会動向を受けて、1998年告示の学習指導要領における体育科の表現運動領域には「リズムダンス」（小学校）が、保健体育科のダンス領域には「現代的なリズムのダンス」（中学校、高等学校）が新たに導入されている。リズムダンスの学習指導に関する縦断的知見を実践研究した筑波大学の村田芳子らは、リズムダンスの特徴として、2点を指摘している。「リズムにのって踊る楽しさ」と「リズムを共有して他者と交流して踊る楽しさ」である。そして、ダンス学習では、「ダンスの始原的な快の感情を保障しながら、生涯にわたってダンスを愛し、新しいダンスを創出できる力を育てていく」ことが重要性であると述べている（村田芳子・2004）。

生涯教育の観点からキーワードを整理しておけば、「いつでも・どこでも・だれでも・みんなで・からだひとつで・調整・身体意識・健康維持・リズムにのって・変身・自己表現・かかわり・共有・交流・踊る楽しさ」などをあげることができる。

### 3-1-3 21世紀を生き抜く身体

次にダンスの素材である「身体」について考察してみる。

21世紀のキーワードとして「身体」に注目する研究者が多い。少し遡れば、1970年代にも同様な傾向がみられた。子どもの体に異変が起ころはじめたころである。そのころ、とりわけ哲学者や心理学者が「身体」に関心を示しだしていた。世紀末には、これまでに例を見ることのできなかつた少年による凄惨な事件が起ころはじめ、機を同じくしてダンスブームがまき起こっている。未成熟で鋭敏な感性の子どもは、ストレス障害、自閉症、拒食症、登校拒否、引きこもりなどというように、現代社会への不適応の症状を身体の悲痛な叫びとしてみせている。そして、21世紀になると、携帯電話などに代表されるコミュニケーションツールの新登場によって、人間同士の直接的な「かかわり」の希薄化が問題になってきた。こうした背景には近代科学主義の掲げてきた「理性中心主義」や「合理主義」が働いている。近代的な制度や組織などから受ける閉塞感に対する身体の叛乱が一気に加速しだしたのである。この叛乱は「モノ化する身体」（高橋和子、2004）の起死回生の叫びなのである。

こうした一連の負債の解決の糸口を「身体」に求める動きが高まっている。人間は理性的で精神的

な生き物である。そして、その根底を支えているのが身体である。近代科学主義は、この精神と身体との関係を二分してしまっていて、心身二元論という発想をすべての基盤においてきた。特に戦後の日本もまたこの近代科学主義に過剰に依拠してきて、帰結として、上記に指摘した「モノ化する身体」状況を呈してしまっている。本研究の立場はこの状況からの脱却を企図するところにある。

ここに指摘するモノ化する身体とは、現代社会の生活疎外状況の結果としてみられる、「閉塞する感性」「離陸する精神」「埋没する表現」の相乗作用として顕現していると捉えることもできるし、問題はやはりそこからの脱却にある（伴義孝・2005）。同様のことを、スポーツ史の稲垣正浩は、「閉じられた」身体から「開かれた」身体への離脱と移動と言っている（2004）。稲垣の指摘する開かれた身体はジョルジュ・バタイユのいう「エクスターズする身体」を参考している。言い換えれば、「非一知」のレベルにある身体、計測不能の「恍惚」状態にある身体、無意識の闇の底深くに眠る身体である。このエクスターズする身体とは、すなわち稲垣のいう開かれた身体への離脱と移動とは「他者肯定」の論理の構築の成立するところにしか立ち現れない。そしてこの「開かれた身体への離脱と移動」を可能にする契機は「触れる」（稲垣正浩・2005）という人間のもっとも原初的な営みである。だとすれば、ダンスする身体とは、まさにエクスターズする身体にほかならない。本研究では、ここにいう他者肯定は自己肯定も含まれると考えるので、モノ化する身体の脱構築を目指す「自他のかかわり肯定」という立場にあることを付記しておきたい。

### 3-1-4 ダンス学習の視点

ここに、ダンス指導に関する理論的な前提を、障害者教育、生涯教育、ダンス教育、身体論などの文献研究から整理しておいた。その結果、いくつかの視点（キーワード）が確認できた。これらのキーワードを「表2」（「バリアフリーなところとからだのふれあい」を実現するためのダンス学習の視点）のように「5W1H」のカテゴリーで分類してみた。そして、本研究では、このような視点にもとづいて、すべての人間に対する差別のない活動を構想している。具体的には、差別のないところとからだのふれあいの指導と、差別のない評価の在り方とを両軸にするダンス指導内容の構築が問われることになる。本研究では、この構想においてのみ、「バリアフリーなところとからだ」の具体化が可能になると照準を定めている。

これらの視点から、ダンス学習の哲学的意味や学習内容や学習方法について、整理しておきたい。

- 1) ダンスは、「いつでも(when)・どこでも(when)・だれでも(who)」できる。そこでのダンスする身体は「なぜ(why)舞う(生きる)のか」という自らの問い(人間存在論)を探求する。そして探求は「開かれた身体への離脱と移動」(稲垣正浩・2004)を可能にする。
- 2) ダンスによってもたらされるその可能性とは、「心身調整・健康維持」なども含めて、「自己表現・自他とのかかわり肯定・恍惚」(開かれた身体への離脱と移動)にある。ここに踊る身体の人間存在論が成立する。
- 3) ダンスの目的(学習内容・what)は「リズムにのる・共有や交流やコミュニケーション・変身やエクスターズ」を経験することにある。この経験が踊る身体において覚知されるときそこに「気づき」の構造(伴義孝・2005)が成立する。そしてこの「気づき」(高橋和子・2004)は、この場合、踊る身体(自己・からだ)と他者(ひと・もの・こと)とのかかわりという生の循環をとおしてのみしか成立しない。そうだとすれば、ダンスの学習目的をこの「気づき」に置くことは、学習内容に深みをもたらす、極めて人間存在論的なアプローチとなりうる。
- 4) 学習であるからには方法論(how)が問われることになる。本研究では、「心と体が一体となった

からだ（ひとつ）で、しかも開かれたからだで、争うことなく楽しく、ふれる」という要点を学習方法の契機として大事にすべきことを指摘しておきたい。この学習方法の設定の在り方について「からだ気づき」（高橋和子・2004）の観点から付言しておけば、ダンスする身体（からだ）が他者（ひと・もの・こと）との生の循環という関係において生起する「気づき」を促すために、その契機となる「感じる・動く・ひらく・かかわる・表す」ことを、踊りという実習過程にいかに組み込むかの問題となる。

つまりダンス実践者は、上記の要約を契機として、心と体が一体となった「からだ」で、しかも開かれた「からだ」で、排他論理という競争原理に拠ってではなく、他者「ひと・もの・こと」を受け入れる「ふれる」という行為を契機にして自他のかかわり肯定を原則とする共生原理に拠って、生の循環というコスモロジーを創造するのである。ここにこそ「ダンス学習」の視点がある。

連盟 50 周年記念フォーラムが掲げたテーマは、この生の循環というコスモロジーの創造を目指すところの、「バリアフリーなところとからだのふれあいを求めて」であった。そして、研究分科会での実践研究発表やレクチャーデモンストレーションや国際シンポジウムなどの全行事が、このテーマのもとに展開された。そこで、本研究では、研究分科会での実践が上記に明らかになったダンス学習の視点と合致するの否かについて、以下に検証してみることにしたい。

表2 「バリアフリーなところとからだのふれあい」を実現するダンス学習の視点

いつ(時) どこ(場) だれ(人) when where who	なぜ(原理) why 〈人間存在〉	何を(学習内容) what 〈気づき〉	どのように(学習方法) how 〈感じる・動く・ひらく・かかわる・表す〉
1 いつでも 2 どこでも 3 だれでも	4 心身調整 5 健康維持 6 自己表現 7 自他肯定 8 恍惚	9 リズムにのる 10 身体意識 11 コミュニケーション・交流 12 共有 13 エクスターズ・変身	14 からだひとつで・身心一如 15 争いのない・楽しく 16 かかわり 17 触れる 18 開かれた身体

### 3-2 各発達段階並びに研究分科会における実践の結果と考察

各発達段階の実践対象とその内容についてはさきに「表1」によってみてきた。ここでは、この資料の出典である『社団法人日本女子体育連盟創立 50 周年記念フォーラム研究紀要』における抽出記述内容を、「表2」において示してある視点（キーワード）にもとづいて分析しておく。記述内容の分析からダンスの種類や発達段階に応じた特徴や傾向が明らかになれば、今後のダンス指導のモデルプラン作成の手掛かりになると考えている。

分析にあたっては、採用した実践資料に同じキーワードが度重なって記述されていても重み付けはせず、また特定のキーワードと類似した用語についても文脈から判読して該当するとして処理することにした。「表3」は、この処理方法にもとづいて、活用資料中の判読キーワードの類別を丸印で示したものである。ここに、この結果をとおして、発達段階や分科会やダンスの種類などによる傾向を考察しておきたい。

なお、分科会は3つに分かれており、それぞれ次のようなサブテーマを掲げての実践であった。研

究紀要の記述頁数も分科会によって、2～6頁の幅でバラツキがあったが、そのことは考慮に入れずに分析を行っている。

- 第1分科会：生涯スポーツ⇒「更なる発展をめざす地域の人々のためのダンスムーヴメント」
- 第2分科会：授業研究グループ⇒「発達段階とダンス表現学習～キーポイントを探る～」
- 第3分科会：大会本部企画⇒「学校発！ 子どもをめぐるバリアフリーなふれあいの広がり」

### 3-2-1 全体的傾向

丸印が多かったキーワードを拾い出してみると、「だれでも」が「自己表現」のために、「身体意識」を高めて「共有」することを第一の目的にしている、ついで「心と体が一体」となって「かかわる」

表3 各発達段階の実践対象と内容

カテゴリー キーワード 発達段階	時・場・人			原理(生きる・人間存在)					学習内容(気づき)					学習方法				計	
	1. いつ	2. どこ	3. 誰	4. 調	5. 健康	6. 表現	7. 肯定	8. 恍惚	9. リズム	10. 身体	11. 交流	12. 共	13. 変身	14. 一如	15. 楽	16. 関り	17. 触		18. 開
乳幼児 ①0～5歳 ②年少中高 ③幼児	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○		○ ○ ○	○ ○ ○		○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	16 9 7
小学校 ④6年 ⑤高学年 ⑥低中高	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○		○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	15 15 10
中学校 ⑦1～3年 ⑧1・2女子 ⑨1～3年	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○		○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○		○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	15 7 11
高等学校 ⑩1年 2年男子 ⑪1年女子			○ ○ ○			○ ○ ○			○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○			○ ○ ○	○ ○ ○			○ ○ ○	6 8 6
短大・大学 ⑫1・2女子 ⑬3年 ⑭クラブ		○ ○ ○	○ ○ ○			○ ○ ○	○ ○ ○		○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○			○ ○ ○	○ ○ ○			○ ○ ○	7 5 5
障害者教育 ⑮全て ⑯中高 ⑰全て	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○		○ ○ ○	○ ○ ○			○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○			○ ○ ○	○ ○ ○			○ ○ ○	6 10 15
生涯教育 ⑱全て ⑲指導者 ⑳指導者 21 全て	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○			○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○			○ ○ ○ ○	13 13 10 11
合計	11	14	18	6	7	20	9	2	11	16	14	17	5	18	15	15	10	12	220

註 表左側「発達段階」の①～の番号は表1の実践者番号、表上段1.～の番号は表2に示したキーワードの番号である。



ことを大事にしており、その結果「楽しい」思いを抱いたことがまず判読できる。

つまり、ダンスは誰でもができる領域であり、自分を表現することを大前提にしている。そのために、ダンスの素材である身体意識を高めることや、一緒に踊ってリズムやイメージや気持ちや感動を共有することを指導する中味（学習内容）に設定していることが読み取れた。また、やり方（学習方法）としては、「体」にだけ働きかけるのではなく、「心」を揺さぶるような「言葉かけ」を工夫したり、「イメージの誘発」を促したり、作品発表の場においても「思いを込めて踊る」ように指導していることが読みとれた。この分析から、ダンスは、心身を投じた身体活動であることがわかる。

さらに、多くの実践例が2人組やグループ学習などの他者とのかかわりを大事にした指導方法を導入している。そして、動機づけから作品発表に至るまで、実践者の意識の中には「踊ることは楽しいこと」が優先され、それが受講者の思いにもきちんと伝達していることが推察された。

一方で、ほとんど記述されていなかったキーワードは「恍惚」であった。すなわちさきにみてきた「非一知」という自我意識や理性的な営みから、解き放たれる状態とでもいうべき身体のありようである。この点については、本研究は今後の課題として捉えておきたい。

### 3-2-2 発達段階の特徴

ここでは、ダンス実践の全体的傾向をはなれて、特に発達段階別の特徴について述べてみたい。

#### 3-2-2-1 乳幼児から小学校にかけて

乳幼児から小学校までと、それらに関わる教員養成大学においては、「変身」の学習内容が重視されている（表3）。子どもは「ごっこ遊び」に象徴されるように、「なにかに変身したり」「イメージや空想の世界を遊ぶ」ことが好きであり、その特徴をふまえて指導がなされている。また、親子での「ふれあい」や子ども同士で「手をつなぐ」などの体験を多く導入しているのも特徴といえる。生身のからだてで直接「ふれる」という原初的感覚を刺激し、ふれあう機会を作っている。多くの指導者は、子どもを取り巻く現状に、つまり「かかわりの希薄」に危惧を抱いていることが、実践説明の文中に多く記述されていた。

#### 3-2-2-2 小学校から中学校にかけて

この時期の指導実践の特徴としては、「自己」や「他者」を肯定する立場が重視されていることと、「他者との交流」を内容に盛り込んでいることがあげられる。ダンス学習では自他を受け入れ認めあうなかで学習が促進される。この学習過程の構造的な特徴が他者と積極的にかかわる契機としての交流の場を創出することになる。

#### 3-2-2-3 高校から大学にかけて

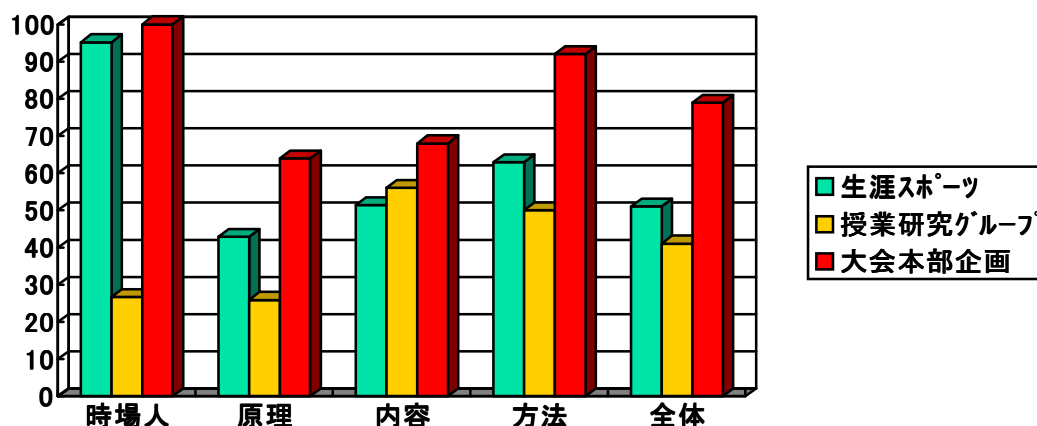
この時期の特徴としては、全体的傾向とほぼ類似しており、際立った特徴は認められなかった。

#### 3-2-2-4 障害者教育

ここでは発達段階や学校などの限定された場所を超えて「いつでも・どこでも・だれでも」がダンスを実践できるというコンセプトのもとに、開かれた身体を目指して行われているという特徴がある。

#### 3-2-2-5 生涯教育

ここでも、障害者教育と同様に、「いつでも・どこでも・だれでも」がダンスを実践するコンセプトのもとに、リズムによって動くというダンスの根源的な要素を重視している。また、「心身の調整」をはかり「健康維持」を促進することが大事にされている。



グラフ1 研究分科会別の平均カテゴリー数 (縦軸はカテゴリー数の平均値の%)

### 3-2-3 研究分科会別の特徴

次に大会主旨を反映する実践課題を掲げた研究分科会別の特徴をみるために、「表3」に示した丸の数の平均キーワード数と、4つのカテゴリー「時・場・人」「原理」「学習内容」「学習方法」別の平均値と、全体の平均値を比較検討することにしたい(グラフ1)。平均キーワード数は、第1分科会「生涯スポーツ」は12.4個、第2分科会「授業研究グループ」は7.4個、第3分科会「大会本部企画」は14.2個であった。

#### 3-2-3-1 第3分科会「大会本部企画」

ここでは、「学校発！子どもをめぐるバリアフリーなふれあいの広がり」のテーマのもとに、本研究テーマを実現するダンス指導の原則が、それぞれの指導者において実現されていた。特に、体ほぐしなどの多様な指導方法を導入して、「こころとからだのバリアフリー」「ひと・もの・こととのバリアを取り除こう」とする実践がなされていた。この結果をさらに吟味すると、ここでは、「バリアフリー」という用語よりも一歩進んだ「ユニバーサルデザイン」という用語にふさわしい実践がなされていたと総括できる。

ユニバーサルデザインは、障害者や高齢者にも適応する多面的柔構造環境を整備することにより、住みよい社会づくりを目指す思想である。今回の第3分科会の実践では、より開かれた身体活動の創出が実現され、学校から地域に向けた発信、ひいては「学社融合」の生涯スポーツの場の実現の可能性が示唆できたと考えられる。

#### 3-2-3-2 第1分科会「生涯教育(スポーツ)」

ここでは、「更なる発展をめざす地域の人々のためのダンスムーブメント」のテーマのもとに、あらゆる場面や時間や人にとって、ダンスムーブメントの活用されることが強調されており、原理的な思いに後押しされて、音楽やリズムにのって、タオルや棒や椅子などの「物とのかかわり」を組み入れた方法が援用されていた。

#### 3-2-2-3 第2分科会「授業研究グループ」

授業研究グループは、連盟の松本千代栄会長の研究提案を受けて日常的に「課題学習」の実践研究を重ね、各発達段階での有効性の実証と教育現場への普及・推進を図っている集団である。今回はテーマとして「発達段階とダンス表現学習～キーポイントを探る～」を掲げての実践研究である。

分析結果をみると、ほかの2つの分科会に比べて、キーワード数が少ない傾向にあった。その原因はいくつか考えられる。幼児から大学までを対象とはしているものの、各実践者が対象とするのは限定された学校種であることをまず指摘できようか。さらに、男女という性差をこえられずにいることもしてきできる。これに関しては、女子校という制度的条件や選択制導入や、学校内での履修制度によって男子が履修できないという条件なども起因している。また、「課題学習」という限定条件も影響している。さらに今回のテーマ事態も限定要因になっている。こうした要因から記述されたに要はより精選されたキーワードを内包することになったと考えている。

### 3-3 テーマを具現するダンス指導のあり方

#### 3-3-1 「恍惚」の状態とダンス

ダンスの理論的前提の一つである「恍惚」状態は今回の対象においてほとんどみつけることができなかった。そこで、大会本部企画国際シンポジウム「<バリアフリーなところとからだ>のふれあいー体育・スポーツ・ダンスの新たな可能性を拓くー」の演者である岩下徹の抄録論文を分析対象にした。岩下徹（京都造形大学・映像舞台芸術学）は山海塾舞踏を軸にして活動する即興ダンスのプロでもある。その結果、岩下徹の実践思想として、「いつでも・どこでも・だれ（と）でも」「表現・自己肯定・恍惚」「身体意識・交流・共感」「身心一如・かかわり・触れる・開かれた身体」を抽出することができた。特に「恍惚」についての記述が印象的であった。次に引用する文章は、さきにもてきたバタイユのいう「エクスターズする身体」を、すなわち自我意識や理性的な営みから解き放たれた身体を、そのままに言い表している。

…世界の果ての「私」という小さな自我（エゴ）の暗がりから、明るく開かれた「外」の世界へ出ていきたいと思いました。そして声にならない叫びのようなものを発し、ただ不器用に動き始めることから、私のダンスが始まったのです。『交感』としての即興をめざして…。

（岩下徹・2005・連盟主催国際シンポジウム紀要）

#### 3-2-2 ダンス指導のあり方

以上のように、発達段階や研究分科会や岩下徹におけるダンス実践をみてきた。

その結果、本研究の対象としたダンス指導は、「だれでも」が「自己表現」のために「身体意識」を高め、他者との「共有」を目的に掲げて、自己＝からだ実現を求めるために「心と体が一体」となつて、「楽しく」「かかわる」ことを大事にした実践が展開されていることが明らかになった。さらに、大会本部企画が提案した指導においては、ダンス指導の理論的な前提を踏まえた実践が展開されていることが明らかになった。さらに、大会本部企画が提案した指導においては、ダンス指導の理論的な前提を踏まえた実践が展開されていた。

総じて、本研究で取り上げたダンス指導のあり方は、本研究テーマであるところに「ところとからだのバリアフリー」を目指して、「<ひと・もの・こと>とのバリアを取り除こう」とする実践であった。別言すれば、「学校」から「社会」に発信された「ユニバーサルデザイン」にもとづいたワークであると評価できる。本研究のテーマを追及するダンス実践の理想的指導のあり方は、「第3研究分科会」（大会本部企画）の示唆において象徴的に提示されている。さらに「恍惚状態」を経験するに至るダンスは岩下徹実践にみられたのであるが、この経験をキーワードにするダンス指導のあり方を求めるためには、「身体へ耳をすます」ことの実践研究が問われることになるという課題が残った。

#### 4. まとめ

本研究では、「バリアフリーなところとからだのふれあいを求めて一幼児から高齢者までを視野に入れたダンス指導の実際―」をテーマに掲げ、理論的な前提から浮かび上がったキーワードにもとづいて、連盟創立50周年記念フォーラムで発表された指導内容を分析することによって考察を進めてきた。発達段階の傾向としては、乳幼児から一般成人に進むにつれて「変身→触れる→自他の肯定→交流」という視点が大事にされてダンス実践が行われていることが明らかになった。障害者教育や生涯教育の視点からは「いつでも・どこでも・だれでも」を合言葉に「心身の調整・健康維持・リズムにのる・開かれた身体」の実現を目指してダンス実践が行われていることが明らかになった。その結果、求めるダンス指導にほぼ合致する傾向が得られた。さらに、学社一体化した生涯スポーツ実現のためには、バリアフリーを超えた「ユニバーサルデザイン・ワーク」が必要であり、その典型として、第3研究分科会が提示した実現が参考になることが明らかになった。

今後の課題としては、今次大会の実践発表などの収録ビデオを分析することによって、今回の分析対象となった記述内容の妥当性の検証が必要かと思われる。

#### 謝辞

本研究は、平成16年度（財）ミズノスポーツ振興会による研究助成を受けて、社団法人日本女子体育連盟の創立50周年記念フォーラムで発表された資料を対象に行ったものである。ご指導下さいました、同振興会の内橋悟様、社団法人日本女子体育連盟片岡康子理事長に、この場を借りて感謝申し上げます。

なお、本研究の研究協力者（資料提供）として、次の方々にご協力頂きました。

高橋真琴（十文字学園女子大学）・馬場京子（法政大学非常勤）

名波陽子・毛利あけみ・佐藤廣子・大塚真里子（日本女子体育連盟生涯スポーツ研究専門委員会）

矢野道代（山口大学非常勤）・山田喜美江（山田リズム体操クラブ）・水戸真由子（福島新体操クラブ）

穂田みづほ（日本音楽学校）・金子直子（ひまわり幼稚園）・宮本乙女（お茶の水女子大学附属中学校）七澤朱音（筑波大学附属中学校）・熊谷昌子（大妻多摩中学高等学校）

君和田雅子（東京都立杉並総合高等学校）・高野章子（元東京都立国分寺高等学校）

三宅香・津田博子（日本体育大学）・中村なおみ（仙台大学）

島内敏子（日本女子体育大学）・中村恭子（順天堂大学）・茅野理子（宇都宮大学）

武半まゆみ（千葉県轟町小学校）・加賀谷成秀（山形県戸沢村立戸沢小学校）

五十嵐淳子（ふくいふれあいの会）・野沢裕子（新潟県柏崎市立東市中学校）・佐分利育代（鳥取大学）

西洋子（みんなのダンスフィールド）・岩下徹（山海塾舞踏手、京都造形大学映像・舞台芸術学科助教授）

竹内里摩子（写真家）本稿の写真は竹内さんによる撮影です。

#### 引用文献・参考文献

\* 広瀬浩二郎（2004）触る門には福来たる、岩波書店

\* 福井達雨（2004）弱いことこそ強いのです、海竜社

\* 井上滋樹（2004）ユニバーサルサービス、岩波書店

\* 稲垣正浩（2004）「触れる」を考える、女子体育 46(5)

\* 稲垣正浩（2004）身体論―スポーツ学的アプローチ―、叢文社

\* 稲垣正浩（2005）「からだ」はどのように捉えられてきたか、体育科教育 53(2)

\* 村田芳子他（2004）生涯学習に向けた「リズムダンス」・「現代的なリズムのダンス」の学習指導に

- 関する縦断的研究、(社)日本女子体育連盟学術研究第21号
- \* 社団法人日本女子体育連盟創立50周年記念フォーラム研究紀要(2005)
  - \* 伴義孝(2005)「気づき」の構造、関西大学出版部
  - \* 高橋和子・伊東博・藤岡完治他(1988)『こころとからだの体験学習』明治図書
  - \* 高橋和子編著(1995)『表現一風の卵が転がったとき一』不昧堂出版
  - \* 高橋和子・久保健他編(2001)『「からだ」を生きる』創文企画
  - \* 高橋和子(2002)『ゆったりイキイキからだきづき』汐文社
  - \* 片岡康子・高橋和子企画・司会(2002)『生涯学習におけるダンスの視点から21世紀の身体文化を問う』第35回全国女子体育研究大会シンポジウム(東京)
  - \* 村田芳子・高橋和子監修指導(2003)学校体育実技指導ビデオ(表現運動)  
『はずんで! 踊って! 楽しい表現運動の学習(小学校編)』文部科学省企画発行、共同テレビ制作
  - \* 堀内かおる編著・高橋和子他(2003)『子どもの生活世界へのまなざし』丸善株式会社
  - \* 高橋和子企画・司会(2003)『スローワークと新しい学びの創出』日本学術会議シンポジウム(熊本)
  - \* 高橋和子(2004)『からだ一気づき学びの人間学一』晃洋書房